

とく  
徳

ほう  
朋

命は「生きていけ」と応援  
している

のぶつか ともみち  
延塚 知道



のぶつか ともみち  
1948－現在  
福岡県出身。元大谷大学  
教授。大谷大学名誉教授。  
真宗大谷派昭光寺住職。

私の場合はノイローゼになってしまいました。ひどい状況になって、酒ばかり飲むもの  
から内臓もパンクしてしまっ、生きているのも苦しいものですから、死んでしまおうと思  
っていました。体重も40キロをきっていました。その時に皆さん笑うかもしれませんが、朝起  
きてふっと、「今日の夕飯は何を食べようか」と思っていました。それに気がついて恥ずかし  
いですが、私は泣きました。つまり頭ではどうしても生きていけないから死のうと思ってい  
るのですが、命は生きて行けと言っていると思ったのです。夕飯を食べようと思うのですから、  
生きていけと言っていると思ったのです。そうすると生きていけと言っている命が正しいのか、  
死ぬべきだと言っている頭の方が正しいのか、となっていくます。命の方が正しいですよ。そ  
れは絶対に正しい。命は「いいところも悪いところもおまえ自身ではないか。勝手なモノサシ  
で文句を言うな」と言っているんです。私は勝手なモノサシでいいとか悪いとかを決めて、命  
を殺そうとまでしていた自分が情けなく恥ずかしく、涙を流しながら命に頭を下げて誤ったこ  
とがありました。

命は生きていけとみんなを応援している。そのままでいい、どこが悪いのだと。私も色々な  
事があって劣等感れつとうかんにさいなまれ、「私のようなものは死んだほうがいい」と思っていたけれど、

そのモノサシを絶対だと本能的に思っていることこそ、苦しんでいく元なのだと教えられてみれば、頭が悪いというのもいいものです。世界でたったひとつの頭の悪さ。字の下手さ、眉毛の薄さ、そういうことのどこが悪いのだと命は言っている。「良いとか悪いとか言うな。そのまま生きていけ」と一人一人に言っている命の声があるのです。それが聞こえないから「自分のモノサシで、何とか自分の思うようにしてみよう」と考えますが、自分の思うようになるわけはありません。ですからお釈迦様は無理な事は言っていません。実に単純な事を言っているのだと思います。その単純な事が私たちにはわからなくなっているのです。人間だけです、他の生き物はみんな文句を言っていない。花は日陰でもパッと咲いてパッと散る。他の動物もそうです。もらったものをちゃんと全うして、どんな状況の中でも縁が尽きたら死んでゆく。「私はなんでこんな人生なのだ」と犬が悩んでいる、そういうことはありません。人間だけはどうもおかしいのです。それではどうして人間だけがどうなるのか、というのが問題なのです。どうしてそうなるのか、そこをお釈迦様は問題にしているのです。

（『宗教の相貌 民族と宗教を考える』）

今回のお話は、私たちの心の奥底からの「いのちの叫び」についてです。私たちには頭や心で考えているよりもずっと深い根源的な願いや叫びを持って生きています。しかしそれに向き合うことなく一喜一憂している私。それで本当に大丈夫でしょうか。（哲弘 拝）



この「徳朋」は仏教を拠り所として生活した方々の言葉に直に触れ、仏教を頭で一生懸命に理解するのではなく、この身で感じる事を願いとして副住職が毎月作成しています。

